

第72回 歴史探訪の会

「紅葉美しい加茂の里山へ石仏に会いに行こう」

実施日：2019年11月20日(水曜日)

場所：京都府木津川市

案内人：林 寛

コース：加茂駅 ～ 岩船寺 ～ 一願不動 ～ わらい仏 ～ カラスの壺二尊 ～ 藪の中三尊 ～ 浄瑠璃寺近傍(昼食) ～ 浄瑠璃寺 ～ 首切地蔵 ～ 大門石仏群 ～ 大門磨崖仏 ～ かも山の家 ～ 加茂駅 (歩行程 約5km)

「石仏の道」は京都府の最南部、木津川市加茂町当尾(とうの)にあります。肌寒い空でしたが、21名が参加して加茂の里山の秋を満喫しました。由緒ある岩船寺と浄瑠璃寺では、ご住職から軽妙なお話を交えた寺の縁起、見どころを伺い、色づいた境内の秋を楽しみました。2寺をつなぐ「石仏の道」は尾根伝いのなだらかな下り坂で、不動明王、阿弥陀如来、観音菩薩、地蔵菩薩など、鎌倉時代に多く作られた石仏に会い、お参りました。午後は大門石仏群や大門磨崖仏を訪ねました。加茂駅と当尾の往復にはコミュニティバスを利用しました。バス会社のお計らいで、当会専用バスを仕立ていただき、ゆったりと移動できました。ガイドさんからは、お寺や石仏の説明のほか、里山に生息する山野草もいくつか教えていただき、深まる秋を満喫できた一日でした。

【集合と出発：加茂駅前】

11月20日(水)朝、加茂駅前はいつになく賑やか。3つのグループがハイキングするという。私たちは駅前のコミュニティバス乗り場で、朝の挨拶、ガイドさんの紹介やコース説明、宝くじみたいなコミュニティバス一日フリー乗車券の使い方を説明してバスに乗り込んだ。増発①号車は私たちだけだった。



【岩船寺(がんせんじ):(729)】

バスは対向できないような山道を15分ほど上り、岩船寺前に到着。石段を上がれ

ば山門である。岩船寺の創立は天平元年(729年)聖武天皇が僧行基に命じて阿弥陀堂を建立したのに始まる。最盛期には広大な境内に39の坊舎を有した。現在は真言律宗西大寺の末寺である。

本堂には、ご本尊の阿弥陀如来坐像(重文)をはじめ、四天王立像、普賢菩薩騎象像(重文)、十一面観音像などがまつられている。私たちは他のグループに先立って本堂に上がり、ご住職の法話を伺った。

境内では三重塔(重文)、十三重石塔(重文)、五輪塔、鐘楼を見学した。

三重塔へは本堂横から通じる道があり、上がりきると塔を真横から見る事ができる。四隅の垂木を支えているのはサルのように見える「天邪鬼」、ユーモラスな顔に、見るほうも思わず笑みが出た。三重塔には1階部分からの芯柱がない。1階の仏間を広くするためという。三重塔前で記念写真。

鐘楼は誰でもつくことができ、有志が順番に鐘を鳴らした。十三重石塔の初重の軸石の四面には、金剛界四仏の梵字が刻まれている。

五輪塔や、門前には石風呂もあった。



【一願不動:弘安 10 (1287)】

石段を下りると、大岩に掘られたお不動さん、右手に剣を持ち怒った顔をされている(母親が子供を叱るように、愚かな人間を叱っているようだ)。ただ一つだけ一心にお願いすれば、叶えてくださるという一願不動。



【絶景スポット】



「一願不動」から「わらい仏」に向かうなだらかな道を行くと、突然視界が開け、生駒山が見渡せる絶景スポットに出た。思わず立ち止まり、遠景をカメラに収めた。

【わらい仏:永仁 7 (1299)】

当尾の代表的な石仏である。上に大きな岩の傘があり、保存状態がいい。阿弥陀三尊磨崖仏で、中央に阿弥陀様、向かって右に蓮台をもつ観音菩薩、左に合掌する



勢至菩薩を従えている。やさしく微笑む阿弥陀様のお顔が印象的だ。

【カラスの壺二尊：康永 2（1343）】



道が交差する分岐点に「からすの壺」とよばれる場所がある。この地に、一面に阿弥陀如来坐像、90度回った面に地藏菩薩立像が彫られているひとつの角石がある。カラスの壺二尊と呼ばれる。阿弥陀如来の横に火袋を彫り込み、そこに燈明を供えるという。

【随願寺跡：(1013)】

「カラスの壺二尊」から5分ほど歩くと開けた場所に出た。かつては大きな寺院があったという「随願寺跡」だ。いまは石段だけが見え、立ち入り禁止になっている。



【あたご灯籠:江戸期】

三叉路に立つ細長い自然石を使用した灯籠で、形式にとられない変わり灯籠。

愛宕神は火の神様を司り、当尾ではお正月にここからおけら火を採り雑煮を炊く風習があったそうだ。



【藪の中三尊:弘長2(1262)】

東小(ひがしお)集落の藪中にふたつの岩があり、正面の岩に、地藏菩薩と、向かって右隣りに錫杖を持つ十一面観音菩薩(長谷の観音様も錫杖をもつので“長谷型”といわれる)、左側の岩に阿弥陀如来を配する、非常に珍しい配置の三尊だ。地藏信仰が強かった時代を表すのか。一同手を合わせて拝んだ。



【浄瑠璃寺:(1047)】

やや遅めの昼食をとったあと、浄瑠璃寺を訪れた。私たちと別のグループも同時に参拝に来ており、境内は混雑した。本堂前で2グループ一緒にご住職の法話を伺った。

この寺は京都の最南端、境内から300m行けば奈良市だそうだ。古来より南都仏教の聖地として大寺の僧が修養、研鑽したところであった。





境内東側には薬師如来を祀る三重塔(国宝)が、池を隔てた西側には九体の阿弥陀如来を安置する九体阿弥陀堂(国宝)がある。東方浄瑠璃浄土と、西方極楽浄土をこの地に表している。九体阿弥陀仏は平安期に多く作られたが、堂、像ともに現存するのはこの寺が唯一とのこと。下品下生(げぼんげしょう)から最高の上品上生(じょうぼんじょうしょう)まで九つの往生の段階があり、どの段階の人も救うという。残念ながら、九体の阿弥陀様のうち二体は修理のために“入院中”、とのことで拝むことができなかった。本堂内には阿弥陀如来中尊像(国宝)のほか、子安地蔵菩薩像(重文)、不動明王(重文)、四天王像(国宝)を安置し、特別公開中の秘仏・吉祥天女像(重文)も拝観できた。池の周りの庭園は紅葉真っ盛り、見事だった。記念撮影！



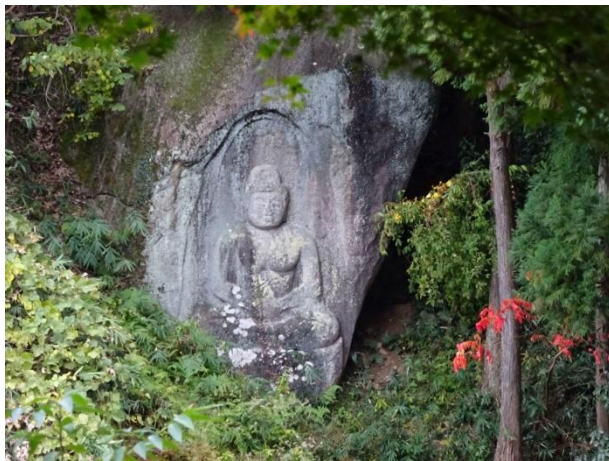
【首切地蔵、大門石仏群:室町～】



「首切地蔵」とは気味が悪い名がついている。首のくびれが深く切れて見えるためとも、処刑場にあったからともいわれている。地蔵と名がついているが、印相をもつ阿弥陀石仏である。

「大門石仏群」は竹藪の中や細い山道にあった石仏、石塔などを集めて安置しなおしたもの。変化に富んだ石仏群だ。心無い人が持ち去ったりするという。

【大門磨崖仏】



いよいよ最後の石仏、「大門磨崖仏」に出会う。この石仏は当尾の石仏群中、最大の磨崖仏で、幅6mの花崗岩に2.8mの如来坐像が彫られている。阿弥陀如来、弥勒如来、釈迦如来などの諸説があるが、まだ確定しきれていない。磨崖仏の真下まで行く道があるが草に埋もれていて、谷を隔てたところから拝む。

【終礼 かも山の家】

大門磨崖仏から坂を下ると、周りに稲田が開けて、コミュニティバスの停留所がある「かも山の家」に着いた。今日一日案内して下さったガイドさんに感謝し、最後に、今年の最後の歴史探訪の会例会であることから、会長から一年を総括する締めくくりの挨拶があり、例会の幕を閉じた。



【山野草】

里山で出会ったいくつかの山野草をガイドさんが紹介、説明してくれた。
・ホウノキ ・ヤブムラサキ ・ノイチゴ ・カラスサンショ ・ビナンカズラ
・ジュウリョウ ・テイカカズラ ・ムラサキシキブ ・カラスウリ ほか

【謝辞】

例会を実行するにあたり、多くの皆様のご協力を頂戴しました。一日里山をご案内いただいた「ふるさと案内・かも」のガイドさんたち、岩船寺のご住職様、浄瑠璃寺のご住職様、快適なコミュニティバスを手配くださった奈良交通バスの関係者様、昼食場所をご提供くださった「あ志び乃」様に深く感謝申し上げます。
ありがとうございました。